

PRAEVIDENTIA DAILY (9月26日)

昨日までの世界：金融政策は棚上げ、財政問題を相対的に意識

昨日は、対米ドルで NZ ドルや豪ドルの下落が継続した一方、欧州通貨は持ち直すなど、米ドルの動きは区々となった。NZ ドルや豪ドルは、中国や米国の株安の影響を受けたとみられるほか、早朝発表の NZ 貿易赤字が-11.91 億 NZ ドルと予想比で赤字幅が大幅に大きかったことも NZ ドルのアンダーパフォームに繋がっている。ユーロやポンドは欧州時間から上昇をはじめ、ポンドについては英 9 月 CBI 小売販売調査が 34 と前月(27) および市場予想(23) を大きく上回り英景気の相対的堅調さが示されたことも主要通貨の中でのアウトパフォームに繋がったとみられる。

この間、ドル/円は米長期債利回りの小幅低下に沿ったかたちで、98 円台半ばへ軟化した。ドルを大きく押し下げる要因はなかったが、米政府債務上限引上げ問題について Lew 財務長官が現在までにとっている資金繰り対策は 10 月 17 日に尽きるとし、米議会予算局も 10 月 22 日までに資金が底をつくとしたことが、政府閉鎖リスクを改めて意識させたとみられる。米上院でも、10 月 1 日開始の来年度の暫定予算案を審議・採決に持ち込むための動議は可決されたが、Cruz 共和党議員が前日より 21 時間超に及ぶ演説を行い議事妨害を行ったことがドルへのセンチメントを悪化させた面がある。米経済指標は区々で、新築住宅販売件数は 42.1 万件とほぼ市場予想通り、耐久財受注のうち最も注目度が高いコア資本財受注（非国防除く航空、設備投資の先行指標とされる）が+1.5%、コア資本財出荷（GDP 算出に用いられる）が+1.3%といずれも市場予想（各々+2.0%、+1.5%）を若干下回ったが回復基調の変化を示すほどではない。

主要通貨ペアの前営業日比変化率と主な変動要因

	変化率	米2年金利差	米2年金利	日2年金利	米10年金利差	米10年金利	日10年金利	米株価	日株価	原油WTI	原油Brent
ドル/円	-0.3	+0.01	+0.01	+0.00	-0.03	-0.03	+0.00	-0.3	-0.8	-0.5	-0.6
	変化率	独米2年金利差	独2年金利	米2年金利	独米10年金利差	独10年金利	米10年金利	欧株価	米株価	原油Brent	西伊の対独格差
ユーロ/ドル	+0.4	-0.00	+0.01	+0.01	+0.00	-0.02	-0.03	+0.1	-0.3	-0.6	+0.02
	変化率	豪米2年金利差	豪2年金利	米2年金利	豪米10年金利差	豪10年金利	米10年金利	世界株価	米株価	中国株価	CRB
豪ドル/米ドル	-0.2	-0.04	-0.03	+0.01	+0.00	-0.03	-0.03	-0.1	-0.3	-0.4	+0.2
	変化率	NZ-米2年金利差	NZ2年金利	米2年金利	NZ-米10年金利差	NZ10年金利	米10年金利	世界株価	米株価	中国株価	CRB
NZドル/米ドル	-0.5	-0.01	+0.01	+0.01	-0.02	-0.05	-0.03	-0.1	-0.3	-0.4	+0.2
	変化率	英米2年金利差	英2年金利	米2年金利	英米10年金利差	英10年金利	米10年金利	英株価	米株価		
ポンド/ドル	+0.5	-0.01	+0.00	+0.01	-0.01	-0.04	-0.03	-0.3	-0.3		

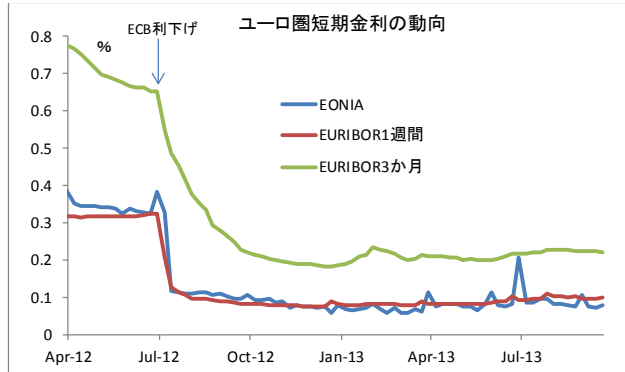
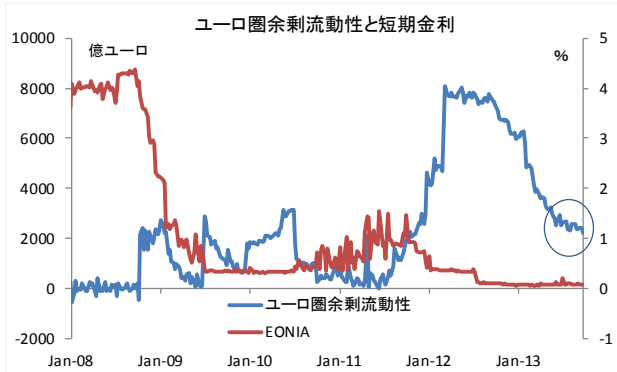
(注) 為替相場、株価および商品価格は前営業日比変化率、金利は前営業日比変化幅(%ポイント)。

きょうの高慢な偏見：ECB 追加資金供給は期待外れのリスク

本日の相場材料としては、①Asmussen・ECB 理事発言(17:30、ややタカ派)、②米新規失業保険申請件数(21:30、前週 30.9 万件、市場予想 32.5 万件)、③米 2Q GDP 第 3 次推計(21:30、前回+2.5%、市場予想+2.6%、前期比値率)、④Mersch・ECB 理事発言(22:20、中立)、⑤米 8 月中古住宅販売成約指数(23:00、前月-1.3%、市場予想-1.0%、前月比)、⑥Constancio・ECB 副総裁発言(23:10、中立)、⑦Stein・FRB 理事発言(23:10、中立、投票権あり)、⑧Kocherlakota ミネアポリス連銀総裁発言(1:15、ハト派、投票権なし)、⑨Pianalto クリーブランド連銀総裁発言(1:35、ややタカ派、投票権なし)、などで、引き続き米国とユーロ圏の中銀総裁発言が多い。

ECB 高官発言では、10 月 2 日の ECB 定例政策理事会に向けて、長期 LTRO などによる資金供給につき具体的な可能性を指摘する発言が出てくるか(ユーロ安)、あるいは今回は決定されない見込みとなるのか(ユーロ高)、が注目される。確かに、ユーロ圏銀行システムの余剰流動性はかつて ECB が下限とした 2000 億ユーロ近くに低下してきており、それと共に今年に入り短期金利に緩やかな上昇傾向がみられている。但し、短期金利は急上昇している訳ではなく、また 2000 億ユーロという水準も本当に短期金融市場全体として必要とされる流動性の下限水準かどうかは、それ以下に下がってみないと分からない面もある。足許、市場の期待は若干高まっているものの、10 月会合では追加的な流動性供給措置の発表の必要性は差し迫っていないとみられ、こうした期待を背景としたユーロ売り圧力は剥落する可能性が高いのではないかと。

一方、Fed 高官発言では、資産購入縮小開始時期が 10 月 FOMC か 12 月 FOMC のいずれかになりそうかにつきどのようなスタンスが示されるかが引き続き注目で、本日の予定の中でいえば、直近 8 月の発言では雇用の強さと資産購入縮小開始に前向きな発言をしていた Piantato 総裁の発言が（どのように）ハト派化するのかが焦点だ。但し、こうした発言が現時点でドル/円相場に強い方向感を与えるとはみられず、上値は重いながらも 98 円台半ばでのみ合いが続こう。



ディスクレイマー

当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、金融商品の売買や投資など何らかの行動を勧誘するものではありません。ご利用に関しては、全てお客様ご自身でご判断下さいませようよろしくお願い申し上げます。

当資料は信頼できるとされる情報に基づいて作成されていますが、当社はその正確性を保証するものではありません。内容は予告なしに変更することがありますので、予めご了承下さい。

当資料は著作物であり、著作権法により保護されています。全文または一部を転載する場合は出所を明記して下さい。当資料は購読者向けに送付されたものであり、購読者以外への転送を禁じます。